

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：24201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16614

研究課題名(和文)現代精神医療倫理におけるラカン派精神分析思想の位置づけと意義に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the Position and Relevance of Lacanian Psychoanalysis in the Ethics of Contemporary Mental Healthcare

研究代表者

上尾 真道(UEO, MASAMICHI)

滋賀県立大学・人間文化学部・非常勤講師

研究者番号：00588048

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、フランスの精神分析家ジャック・ラカンの60-70年代の理論、およびその後のラカン派精神分析の理論について、その倫理的意義を明確にした。特に歴史的な文脈を明確にすることで、ラカン思想が、社会的な管理に貢献する限りでの精神医療の関心と異なり、そうした社会とは別の生き方を探る実践をめぐるものであることが明らかになった。また、現在の発達障害臨床の理解にも貢献するものであると考えられた。

研究成果の概要(英文):This study clarified the ethical relevance of Lacan's 60-70s psychoanalytical theory as well as that of Lacanian school in a later period. Especially, by shedding a light on the historical context, it was made clear that Lacan's thought was not concerned with psychiatric care in terms of a contribution to social control but as a practice of creation of other ways of living, emancipated from social pressure. This character of Lacan's thought can be helpful to better understand the actual clinical situation of developmental trouble.

研究分野：思想史・精神分析

キーワード：ラカン フロイト ドゥルーズ 享楽 すべてでない 自閉

1. 研究開始当初の背景

フランスの精神分析家ジャック・ラカンの思想は、これまでも、西洋哲学と精神医療の中間領域において主体性と倫理をめぐる重要な思索を展開してきたものとして、研究されてきた。しかしラカンが主に活躍した 20 世紀中頃以降、精神医療においては大きなパラダイムの変化が起きている。とりわけ重要なのが、病院中心の医学治療の体制から、より広く社会に普及する精神保健福祉体制への移行である。そのため、この変化について歴史的視点から明確にしつつ、ラカンとそれ以降の思想実践の動きとの関係をつまびらかにしたうえで、改めてラカン思想の射程について整理することが必要であると考えられた。したがって本研究は、60 年代-70 年代をひとつの分岐として思想史・医療史の検討を踏まえつつ、現代におけるラカン理論の意義を明確にするように試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、後期近代の精神医療体制における新たな倫理的課題との関係から、60-70 年代以降のラカン及びラカン派精神分析理論を読解・整理し、その位置づけと思想的意義を明らかにすることである。この後期近代の時代は、R.カステルが「精神分析以後」の時代と呼んだように、古典的な精神分析の失墜の時代として一般に認識される。それは以下の三つの変化と関係すると考えられた。

1) 第一に、社会における権力の家父長的構造の変化である。つまり後期近代は、父性的権威を軸とする主体化モデルが治療構造においても効果を弱める時代と考えられる。

2) 第二に、精神医療・心理療法分野における身体概念の拡張である。行動や環境へのアプローチのなかで、フロイトの「無意識」概念に代表される心的装置モデルの実効性が問われている。

3) 第三に、精神科ケアと社会的正常化圧力の共外延性である。治療がますます、社会的管理モデルと切り離しにくくなっているように見えるなかで、精神分析がどのような主体生産に寄与すべきか、という倫理的問いがいっそう重要となっている。

したがって、本研究では、このような変化が生じた歴史的な脈を再構成しながら、ラカン及びラカン以後の分析家の思想と実践の展開の意義を、関連する哲学との関係も参照しつつ、解明するよう試みた。

3. 研究の方法

60 年代から 70 年代にかけてのラカンのテキスト、およびラカン派精神分析に関する資料を収集し、その読解と整理を行った。また同じように、同時代の精神医学・哲学・心理学などについての文献資料を収集し、ラカン派精神分析の思想・実践との直接的ないし間接的な関係について明らかにするよう試みた。資料収集に関しては、ラカンの未刊行テクス

トや、ラカン派精神分析学派の古い雑誌など、国内で入手不可能なものについては、現地フランスでの資料調査を行った。

4. 研究成果

(1) 60-70 年代における精神医療制度改革とラカン思想の意義：フランスで 1968 年から 72 年にひとつの頂点を迎える精神医療制度改革について歴史的経緯を整理し、そのなかで精神分析が、どのような機能を与えられていたか、またラカン自身がどのような態度と実践を通じてそれに応答しようとしたかを明らかにした。

フランスの精神分析は、64 年までに、主に医師・心理士・純粋精神分析という、精神分析の規定に関わる三つの領域的特徴にしたがって、政治的な分裂を被ってきた。ラカン派はこの第三のもの、精神分析を他の実践に依拠せず、それ自体として内在的に根拠付けようとする運動を組織したのものとして考えられる。

一方で、60 年代後半のフランスでは、病院中心的精神医療に代えてセクター制度という多職種横断的な地域精神医療へと向かう方向性が行政的にも示され、精神分析もまたそうした新たな精神医療パラダイムへ組み込まれることが期待されていた。これに対し、本研究は、ラカンのテキスト読解から、彼がこうした状況を決して十分には歓迎しておらず、精神分析の意義を、社会的包摂の道具であることとは別のところに置こうとしていたことを確認することになった。

さらに、それではどこにその意義はあるのか、という点をめぐっては、60 年代にラカンから大きな影響を受けたジル・ドゥルーズや、またラカンの新たな教え子となったジャック＝アラン・ミレール、ジャン＝クロード・ミルネールといった人々との思想的関係を明らかにすることで、ラカンにおける、運命的な「出会い」としての、あるいは「真理の手がかり」としての「症状」概念の重要性を確認することになった。すなわち科学的な知の裂け目として登場するような真理であり、「資本主義の出口」を示しうるような真理である。ラカンにおいて、こうした「真理」と関連付けられる精神分析実践とは、単に治療に関わるのではなく、精神分析家の養成、つまり分析の終結に伴う精神分析家の再生産という主題に結びついている。こうした再生産は、当時、大学を通じて全面的に実現されんとしていたような国家従属的な再生産（ラカンのいう「大学的言説」）とは質を異にするものとして定式化された（「分析家の言説」）。

こうして本研究は、ラカンの精神分析の倫理的意義を、後期近代の精神医療体制において、正常化とは異なる、主体的実存の別の可能性へ向かう道を問うものとして、明確に位置づけることとなった。ただし、この可能性自体が具体的実践としてどのようなもので

あるかについては、後期近代的体制の問題構造のいっそうの明確化とともにその内容を検討する必要があることが、いっそう、はっきりと認識されるに至った。

(2) ラカンの身体論—享樂と「すべてでない」：ラカンの精神分析実践の現代的意義の解明のために、70年前後における身体論についての検討を行った。とりわけこの検討は、彼の「享樂」概念を中心に実施された。ラカンは、かなり早い段階から「享樂」という用語を使用していたが、本研究では、66年ごろを境に、この語が、それ以前のように観念論的ではなく、強く「生命」や「身体」といった水準において具体的な実践のキータムとして使用されるようになることに注目した。それはまた、精神薬理学やサイバネティクスなど、科学的医学の当時の発展を強く意識してであることもまた確認された。すなわち享樂とは、科学による介入の中で生きている身体そのものを捉えるための概念となったのである。

このようなラカンの享樂-身体概念の特徴は、例えばハイデガーの技術論との比較のなかでその意義を際立たせることができる。後期ハイデガーは、技術の「集めたて Gestell」の本質において、開かれた世界に生じる人間が、(ユクスキュル的)環世界のうちで動物化されて生きることになる側面を、「生存圏」の思想として記述している(「形而上学の超克」第二六節)。同様に、70年ごろのラカンもまた、ロゴスを、自然の閉じた必然性ではなく、自然を切断する開放的な働きとして捉え、その上で、人間を、環世界的想像界への閉鎖によって成立する事態として考えた。ただしこの時、ラカンは、そうした環境閉鎖の内部に異物として留まり続ける排泄物の身分に目を留める。身体とはそれゆえに、技術により再構築される物体である以上に、汚物としての負荷を背負うものとして考えられるのである。

このような身体性こそが、70年代ラカンの思想においては強調される。またそれは、とりわけ理論内におけるセクシュアリティの再評価とも結びついている。それまでは言語的諸項の関係を指示する構造主義的概念であったシニフィアン連鎖は、この頃から、一と他のあいだの性的な接近という問題を基礎として捉え直されるようになっていく。さらにラカンは、この接近の不可能性(性関係の不在)に対する二重の反応として、男女の性差を定式化し直している。男の論理とは、この不可能性に対する一種の観念論的な解決であり、疎外された主体と汚物的身体のあいだの出会いという仕方、関係の不在を埋める。他方で、女の論理として示されたのは、この不可能性に対応する別の仕方である。上述の男の論理が幻想による締結によってシニフィアン領域の全体性を確保するのに対して、女の論理は「すべてでない」として、この領域を開かれたままに保ち、他なる

享樂の追求という契機を導入するのだ。

こうして本研究は、70年代のラカンの精神分析実践が、身体的な出来事に強い強調を与えていたことを確認した。またその上で、分析実践において問題となる真理の契機とは、女の論理によって示されるような、他なる享樂への開かれとして、考えることが可能であることを明らかにした。

(3) 現代精神医療における「自閉」とラカン派精神分析の関係の解明：70年代以降から現代にかけてのラカン派精神分析の理論作業における重要問題のひとつとして、「自閉症」をめぐる議論の流れを整理し、その意義を確認した。これまで、ラカン派精神分析の周囲において児童精神療法の議論が盛んであったことはそれほど着目されてこなかったが、実際、モード・マノーニやロジューヌ夫妻などにより、理論的にも極めて重要な視点が提示されていた。本研究では、公開研究会の形で、こうしたラカン派精神分析「自閉」論の理論史的経緯を共有する機会を設けつつ、その現代的な意義についての検討を実施した。

ここではまず前提として、自閉スペクトラムを中心とする現代の「発達障害」概念の歴史的コンテクストの解明を試みた。発達障害概念が現代において有する特権的な位置とは、それがはっきりと、学問的な定義に即した存在判断のパラダイムから、様々なアクターからなる医療実践現場を調整するプラグマティズムのパラダイムへの移行を示している点である。そこには、医学的な権威の時代から、民主的とも呼べるような、医療福祉的協同の時代への移行を認めることができる。

また、その移行に伴い「自閉」概念にも、それが表現する内容の変化が認められる。20世紀の前半において、「自閉」は、統合失調症を中心とした「精神病」圏の問題との関連で提示されていた。そこでは「自閉」は、病院収容の時代における「孤立」の問題と通底しており、社会的理想の見地から眺められた、非社会的な外部として知覚されていたと考えられる。これに対して、20世紀後半の転回とは、それまで純然たる「外」として眺められたものを、あるひとつの生存領域として知覚し直そうとするものだったと考えてよい。そこでは「自閉」とは、社会性の手前において、「開かれ」た生の帯域として理解されるようになる。

本研究は、こうした帯域の構成を、現代のラカン派精神分析の視点からどのように理解されるか、フランスの精神分析家エリック・ロランの著作を参考に検討した。ロランは、ラカンの享樂概念を利用しつつ、その臨床的な現れかたに従う病理構造の鑑別の議論を提唱しており、それによると、自閉症とは、享樂が「縁」へと回帰するものとされる。ここで主に考察されているのは、目や皮膚や耳などの感覚器官であるが、それは主体とその外部との境界そのものがこの構造におい

て重要であることを告げている。この開かれたままの境界領域は、それを閉じるための外的器官を必要とする。こうした構造において、ロランが提唱する臨床は、この外的器官の換喩的な展開可能性を重視する。またこの着想は、こうした境界領域の延長として施設や共同体が考えられる限りにおいて、単に個人としての自閉者の治療のみならず、「心」の装置としての治療環境全体の捉え返しにもつながるものとして考えられた。

(4) 現代的主体化の条件としての「すべてでない」の思想的展開：先述したラカンの70年代の思想的成果のひとつとしての「すべてでない」の論理は、それ自体が後期近代の精神保健福祉の体制を特徴づけるものであるとも考えられる。すでに現代思想においては、この点と関わりの深い幾つかの思想的展開があり、それらについて再びラカンの精神分析との関連のもとで考察することで、ラカン思想の現代的な意義を取り出すことが必要であった。

そのために第一に、ドゥルーズ＝ガタリの精神分析批判の意義とラカン理論との関係についての検討を実施した。ドゥルーズについては、60年代の『ニーチェの哲学』や『意味の論理学』に読みとられるように、症状への運命愛を通じたルサンチマン治療として、精神分析に期待をかけるさまが見られる。しかし、このような期待が、「内部」と「外部」の区別を維持する構造との関係のうちに置かれていると考えられるのに対して、1970年代以降のドゥルーズ＝ガタリの思考では、外部を持たない平面における、忘却の力が強調される。この点には、精神医療や帝国主義的資本主義の変容の関連を認められ、さらにはラカンにおける「すべてでない」の主題もまた合流する。「すべてでない」を中心に後期近代を捉え直すことが新たな課題としていっそう確認された。

また第二には、ランシエールの政治思想との関連のもとで、精神分析的な集団形成の理論の現代的射程について検討した。ここではラカン理論の基礎的前提として、フロイトの理論についても遡って検討した。ランシエールについては、特に『不和』における議論が取り上げられた。そこでは、分配に先立つ政治的集合性の成立において数えられずにあった境界的要素としての「デモス」を問題にすることで、政治的集合の「すべて」を新たに刷新する契機が論じられている。これと同様に、フロイト＝ラカンにおいて、集団形成の理論では、「すべて」の設定とその余剰という問いが立てられている。ただしフロイトにおいてこの問いは、暴力の問題と合わせて考えられることとなる。ラカンの享楽概念の身分とも関わるこの論点について、いっそうの研究が必要であることが明らかになった。

最後にフーコーの70年以前の精神分析評価の再検討を行った。とりわけ「狂気、作品の不在」と題されたテキストは、精神医療改

革の節目において、来るべき狂気の時代が予告されたテキストとして重要である。このテキストを『狂気の歴史』と『精神医学的権力』のあいだに置きつつ、それぞれの精神分析評価の移動を跡付けた。その結果、精神分析については、一方で狂気との対話を開きつつ、他方でこれを別種の新たな疎外へ閉じ込めるものとして、その二重の振る舞いこそが問題にされていることが明らかとなった。「狂気、作品の不在」では、その形象が、言語における「非言語」の譬として提示されている。本研究は、こうした形象が、『精神医学的権力』における狂気と発話という主題を経由して、後期フーコーの真理論に接続している可能性を指摘することできた。

以上、(1)から(4)の研究を通じて、後期近代の精神医療体制との関連における、ラカンの精神分析理論の倫理的意義が確認された。ラカンの精神分析思想は、社会的な正常化と統治の使命を担う限りでの精神医療の傾向に対して、そのような社会と別の生き方への道を分析実践を通じて発見させようと試みるものであったと言える。そのような視座は、享楽・身体とその「すべてでない」という特徴の発見によって明白に提示された。また自閉症の領野に顕著なように、そうしたラカンの思想は、社会的主体化の手前における生のあり方についての理解に理論的な貢献をなすものである。しかし他方で、研究の過程で、70年代の精神保健福祉自体が、変容した世界資本主義との関係のもとで、そもそも「すべてでない」という観点から理解すべき特徴を持つものであることも認識されてきた。この観点からの思想史的研究を通じて、現代性の要素を解明することが、ラカン思想のさらなる展開に必要であることが明確化した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

上尾真道「忘却の政治：あるいは「書かれないことをやめない」もの周りで」『Hyphen』、査読無、2号、2017年、pp. 3-10.

上尾真道「「運動」としての精神分析のために」『at プラス』、査読無、30号、2016年、pp. 52-66.

上尾真道「ラカンとストア哲学：あるいはドゥルーズ『意味の論理学』との距離」『フランス哲学・思想研究』、査読有、21号、2016年、pp. 230-240.

上尾真道「フロイトの冥界巡り—『夢解釈』の銘の読解—」『人文学報』、査読有、109号、2016年、pp. 1-32.

〔学会発表〕(計9件)

上尾真道「サイボーグ・ラカン—真理・身体・享楽をめぐる—」第7回東京精神分析

サークルクロック、2018.3.15、東京。

上尾真道「「すべてでない」時代の政治をめぐる試論—ポスト近代政治と「女の論理」」、第43回社会思想史学会大会、2017.11.5、京都。

上尾真道「幻想の彼方、自己の傷—ドゥルーズのクライン読解」、日本精神分析的心理学療法フォーラム第6回大会、2017.7.1、大阪。

上尾真道「フーコーにおける精神分析と狂気—『狂気の歴史』から『精神医学的権力』まで—」、京都大学人文科学研究所・共同研究『フーコー研究—人文科学の再批判と新展開』、2017.5.14、京都。

上尾真道「『エクリ』後のエクリ：「症状ジヨイス」の読解の試み」、第6回東京精神分析サークルクロック、2017.3.19、東京。

上尾真道「忘却の政治あるいは「書かれないことをやめない」ものの周りで」、DG-Lab 公開実験「DG-Lac(an)」、2016.12.3、大阪。

UEO, Masamichi, 《Solidarity and Disagreement : Revisiting Freud's group theory 》, 10th meeting of Psychoanalysis and Politics: Solidarity and Alienation—Social structures of hope and despair , 2016.5.6, Wien.

上尾真道「現代病理モデルとしての「自閉」と発達障害」、第四回「精神分析と倫理」研究会、2015.9.19、京都。

上尾真道「60年代ラカン理論における記号と因果—ドゥルーズ『意味の論理学』との距離—」、日仏哲学会 2015 年秋季研究大会、2015.9.12.

〔図書〕(計7件)

ギヨーム・シベルタン=ブラン著、上尾真道、堀千晶訳『ドゥルーズ=ガタリにおける政治と国家—国家・戦争・資本主義』書肆心水、2018年、総350頁

ジャン・ウリ著、多賀茂、上尾真道、川村文重、武田宙也訳『コレクティブ』月曜社、2017年、総424頁

上尾真道、牧瀬英幹編、丸山明、池田真典、松本卓也、河野一紀、渋谷亮、小倉拓也『発達障害の時代とラカン派精神分析』晃洋書房、2017年、pp. i-vii, 2-28, 257-259.

上尾真道『ラカン 真理のパトス』人文書院、2017年、総342頁。

上野修、米虫正巳、近藤和敬編、中村大介、ウーリヤ・ベニス=シナスール、原田雅樹、坂本尚志、上尾真道、信友建志、藤井千佳世、朝倉友海、木島泰三『主体の論理—概念の論理—二〇世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』以文社、2017年、pp.193-213.

市田良彦、王子賢太編、小泉義之、佐藤淳二、箱田徹、布施哲、長崎浩、沖公祐、佐藤隆、中村勝己、廣瀬純、長原豊、中山昭彦、佐藤嘉幸、松本潤一郎、上尾真道、立木康介『現代思想と政治』平凡社、2015年、pp.541-573.

ブルース・フィンク著、上尾真道、渋谷亮、小倉拓也訳『「エクリ」を読む—文字に添って』人文書院、2015年、総282頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上尾 真道 (UEO, Masamichi)

滋賀県立大学人間文化学部・非常勤講師

研究者番号：00588048